

角石御番所勤番日記

橋 本 和 雄

(会員・佐伯市蟹田)

〔構成〕

1. 角石御番所について
2. 角石御番所役人の構成と資料記載事項について
3. 江戸末期佐伯藩の他領との交流状況について

はじめに

大分へ出るたび立寄ることにしていた古書店主より、佐伯藩関係の資料があることを知らされた。それが写真に見られるとおりの「角石御番所勤番日記」である。縦四一・五糎、横一四糎、厚さ五ミリのこの資料がどういう経路で大分市へたどりついたのか聞かせてもらえなかったが、何はともあれ佐伯の昔を伝える貴重な資料なのでこれを求めた次第。さてこの資料から読みとれる事柄を紹介していきたい。

一 角石御番所について

佐伯城下へ入るためには番所を通過しなければならなかった。この番所について『佐伯市史』（二〇五頁）では次のように記されている。「元禄十四年十二月始めて養賢寺の前に関門（馬場先の関）を設けて城下に入る行人の取締りをしたが宝永五年正月には中村外からの入口、



本町東端に方形の墨壁を築いて関門をつくり枳形の関と称した。しかし他領に通じる陸路の入口は角石の関で、ここには番所が置かれ、藩吏が常駐した。」

さて角石御番所であるが『佐伯秘説録』五九頁に次の文章が見られる「角石の構へは延宝四、五年の頃出来たり、上役も以前はなく此頃よりおくこととなりたり、御初入なり、是も中村恩敬の物語なり、恩敬俗称は彦左エ門なり」。延宝四年は一六七六年にあたる。

初代藩主毛利高政が日田から佐伯へ入部した一六〇一年（慶長六年）から以降次第に制度が整えられていった様子を物語ってくれる。

更に同書九六頁には「角石番所の番人」と題して享保四年（一七一九年）八月八日、角石番所は向後歩行（かち）の者に申付べく候、足輕共相加へ可申候」の文がある。この事から角石御番所勤務は藩士の中で徒士（かち）の者があたることになった事が分る。この時定められたことはその後もずっと続いた様子である。その事を「角石御番所勤番日記」からみることにしよう。

なお角石番所の建物について『秘説録』一二二頁に次の

ような記載が見られる。「角石番所山手の石垣堀、文化三寅年十一月（一八〇六年）角石御番所山手の方、石垣是迄杉垣の処、此度練堀に致し候様仰付らる」

二 角石御番所役人の構成と資料記載事項について

「角石御番所勤番日記」（以下「勤番日記」とよぶ）は弘化二年正月二八日より三月二七日までのものである。現行の大陽暦になおすと一八四五年三月七日から五月三日までとなる。さてこの勤番日記の記入形態であるが、初めに「勤番役人氏名」次に「番所通過者」といった形でどのページも次のように書かれているので二ページほど紹介することにとどめたい。

二月朔日

富沢 来之進

吉田 嘉藤治

加番 下川 廣 太

御足輕

盛 平

弥惣太

一、筑後表より小者貳人

船頭町名護屋幾五郎方へ

罷越候 屈之儀下番

弥惣太へ申聞候

一、阿波表より小者壹人

右同屋へ罷越候屈之儀

申聞候

一、今夕宇目表より男女

兩人仲嶋町海五郎方江

罷越候付 屈右同断

同日 天氣吉

白井 源吉郎

富沢 来之進

加番 下川 廣太

御足輕

織 作

盛 平

一、昨夕宇目表より男女貳人

中島町海五郎方江罷越居候間

男壹人今日致出立候ニ付屈

之儀下番織作江申聞置候

一、右同所より上下三人内町

玉屋重五郎方江罷通候ニ付

屈右同断

この「勤番日記」に記されている角石番所役人の氏名等は増村隆也著『佐伯郷土史』後編一九〇〜一九五頁に記されている御家中席帳と題して書かれた氏名と合致するのが多いのである。これをもとにして見ていくと前記の番所勤番役人は

富沢来之進||御徒士並

吉田嘉藤治||御徒士並(但し『佐伯郷土史』には吉

田嘉藤治ではなく「嘉藤吉」としてある。なまえに「嘉

藤吉」というのは誤植ではと思うのだが分らない。)

下川 広太||御徒士

白井源吉郎||御徒士

ということになり、享保四年(一七一九)の「徒士の者に申付べく」の定めが弘化四年(一八四五)においても

第一表 月日別佐伯城下 来訪者種類別表 (但 弘化2年正月29~3月25日迄)

来訪月日	来訪者の出身地	来訪者の種類と人数	来 訪 先
1月29日	府内	小者 1人	内町 保田屋作兵衛
2月1日	筑後	小者 2人	船頭町 名護屋幾五郎
" "	阿波	小者 1人	" "
" "	宇目	男女 両人	仲嶋町 満五郎
" 2日	宇目	上下 3人	内町 玉屋重五郎
" 4日	臼杵 大徳寺	僧 1人	大日寺
" 6日	宇目	小者 1人	内町 満五郎
" 8日	鶴崎	下作稼 2人	米屋 市兵衛
" "	延岡	小者 1人	国矢直理殿方
" 9日	竹田	小者 1人	名護屋 幾五郎
" "	鶴崎	小者 3人	保田屋 作兵衛
" 10日	臼杵	家中	中西兵米
" "	府内	男女 4人	船頭町 判屋太右衛門
" 11日	日向		臼坪 橋迫内記
" "	臼杵	小者 1人	善教寺
" "	府内	小者 2人	判屋 太右衛門
" "	臼杵	小者 1人	保田屋 作兵衛
" "	臼杵	小者 2人	朝谷寺 (潮谷寺のことか)
" "	阿州	藍玉屋 1人	内町 保田屋作兵衛
" 12日	宇和嶋	小者 1人	津保屋 安右衛門
" "	鶴崎	小者 1人	名護屋 幾五郎
" 13日	肥前佐賀表	上下 2人	保田屋 作兵衛
" 14日	日向延岡表	水月 丈可	高妻 謙之進
" "	阿州	小者 1人	保田屋 作兵衛
" 15日	長州	小者 2人	内田屋 新右衛門
" "	杵築	上下 4人	大日寺
" "	臼杵	河内屋 文治	保田屋 作兵衛
" 16日	京都 愛宕山	使僧上・下 2人	船頭町 坂本屋由兵衛
" "	伊予 松山	妙園寺より使僧 1人	久成寺
" "	延岡	小者 1人	浅沢元右衛門
" 18日	高崎表	瓦し 1人	坂本屋 由兵衛
" 19日	臼杵	家中味岡孫太郎使 1人	千葉曾右衛門
" 21日	日向	専念寺 使 1人	黒田 慎吾
" "	摂州 大阪	丁人態 2人	津保屋 保右衛門
" "	伊予 松山	妙園寺 使僧 1人	久成寺
" 22日	伊予 松山	小者 1人	内田屋 作兵衛
" 23日	竹田	神主日下市正方より上下 5人	柴田 左京
" 24日	阿州	商人密屋宗竹	名護屋 幾五郎
" 27日	阿州	商人 1人	保田屋 作兵衛
" "	鶴崎		米屋 市兵衛
" 28日	竹田	家中宇野虎五郎	木許 良蔵
" "	府内	小者 1人	判屋 太右衛門
" "	鶴崎	上下 5人	中村彦右衛門
" "	日向	2人	名護屋 幾五郎

来訪月日	来訪者の出身地	来訪者の種類と人数	来訪先
2月28日	阿州	藍玉屋 1人	保田屋作兵衛
" 29日	広崎	船頭分作	坪屋保右衛門
3月1日	臼杵	小者 1人	保田屋作兵衛
" "	広崎	小者 1人	" "
" 2日	高田	小者 1人	久成寺
" 6日	房州	小者 1人	名護屋幾五郎
" 7日	伊予	上下 6人	関内蔵允
" 8日	竹田	小者 1人	名護屋幾五郎
" "	豊前 <small>(江戸生大を各1名を重岡)</small>	軽業師 12人	船頭町辰五郎
" "	宇目	小者 1人	大津留柏助
" "	府内	小者 1人	判屋太郎右衛門
" 9日	播州	小者 1人	坪屋保右衛門
" 10日	長崎	茶屋甚四郎梓己之助上下2人	日向屋善兵衛
" 11日	臼杵	天満寺使僧1人 下人1人	大日寺
" 12日	大白	小者	津保屋保右衛門
" "	大白	小者 1人	保田屋作兵衛
" "	播州	小者 2人	" "
" "	播州	小者 2人	津保屋保右衛門
" 15日	臼杵	浄雲寺より上下3人	西名転
" "	大阪	小者 1人	保田屋作兵衛
" 17日	大豊	町人 2人	名護屋幾五郎
" 18日	木浦	小者 2人	内町小松屋柳兵衛
" "	豊前	小者 1人	名護屋幾五郎
" "	長州	小者 1人	船頭町内田屋新右エ門
" "	長勢	小者 1人	" 舛野屋仁右エ門
" "	臼杵	小者 1人	船頭町布袋屋幸七
" 19日	宇目	小者 2人	後藤快助
" 20日	日向	灘波立達・東口千庵	高妻謙之進
" "	播州	小者 1人	名護屋幾五郎
" "	阿州	小者 1人	" "
" "	長崎	商人 2人	日向屋善兵衛
" 21日	阿州	小者 2人	壺屋安右衛門
" "	鶴崎	小者 1人	保田屋作兵衛
" 23日	長崎	御用達茶屋甚四郎上下2人	日向屋善兵衛
" "	竹田	小者 1人	名護屋幾五郎
" "	大阪	小者 2人	津保屋保右衛門
" "	竹田	竹田家中新宮小太郎家内	奥川弥治兵衛
" "	竹田	中山京より使 1人 上下3人	松岡国太夫
" 24日	宇目 正蓮寺	婦人 1人	児玉律蔵
" "	筑前	小者 1人	名護屋幾五郎
" "	臼杵	小者 1人	赤沢忠兵衛
" "	臼杵	小者 1人	日向屋善兵衛
" 25日	府内	小者 2人	船頭町幾五郎

実施されていたことが分る。角石番所に勤務する人数は「勤番日記」においては常に五名であることから、番所役人は五名とされていたと考えられる。その五名のうち二名は足軽であり、三名は御徒士身分の者である。この五名の勤務の状況について触れておきたい。

「勤番日記」は正月二十八日から三月二十七日までの五八日間を記載してあるが加番役の下川広太の氏名だけは五八日間ずーっと記載されている。従ってこの間全く休みが無かったということになり、現代感覚ではただ驚くばかりである。

他の二名（御徒士）の勤務は各人二日続けて勤務すれば、その後五日間氏名が記されていないところをみると、他の仕事にまわったり、休みもあつたりしたのであろう。五日後再び各人番所役人の仕事に就いているのであるが、藩政の分業体制の確立していることをこの事が知らせてくれる。（五日後勤務の仕方は三月四日までで五日以降は各人二日連続勤務、その後三日置いて四日目に二日間連続勤務という形態に変わっている。これがどうした事情から生じたものか勤番日記からは何うべくもない。）

足軽の勤務は二日連続勤務である。しかし何日後に再

び勤務するといった御徒士の時と同じパターンは見られない。五八日間のこの資料からは不定期な繰り返し勤務を見ることが出来るだけである。

次に「勤番日記」の内容であるが、こゝには佐伯藩領以外から来た者のみが記されている。先ず何処から来たのが明記され、続いて来訪者が何者なのか書かれている。氏名を明記するのは武士だけで、それ以外の人の場合は殆んど「小者」として記されている。その様子については前掲の第一表「月日別佐伯城下来訪者種類別表」を見ていただきたい。他領から佐伯城下へ来た人が城下のどこへ滞在するのかについても各人ごとに明記している。そしてその人たちが城下から出立していった場合も同様の扱いである。

このように角石番所を出入する一人一人を厳重に確認するとともに、こうした状況についてはその日のうちに城内役所へ報告されていた。その報告をする役は足軽が受け持っていたと思われる。

三、江戸末期佐伯藩の他領との交流状況について

前掲の第一表「月日別佐伯城下来訪者種類別表」を、

第二表 来訪者の出身地別来佐
(角石番所通過) 頻度数

角石番所通過頻度数		
地区		
大分県内	臼杵 目(含木浦) 竹府鶴高 高杵	14
		7
		7
		6
		6
		1
		1
九州	日向 前崎 筑前 筑後 肥前 佐賀	7
		3
		3
		1
		1
四国	阿波 伊予 播磨 大長 京勢 房	8
		5
本州	波予 州 阪州 都州 州	4
		4
		2
		1
		1
		1

まとめて第二表の「来訪者の出身地別来佐頻度数」を作
成した。これを見て先ずわかることは隣接の藩からの往
来が第一に多いということである。大分県内では臼杵領
からの十四、宇目・竹田の各七、県外では延岡・日向七
の数がその事を示している。しかし四国阿波からの来佐
頻度数八という数字はこうした傾向とはいささか違った
面を見せている。伊予(愛媛県)の方が距離からいって
も近いのだからこちらが多くても良いはずなのに阿波
(徳島県)が多いのはどうした訳なのだろうか。この事
を明らかにする資料は今のところ見あたらない。しかし

と考える事が妥当のようである。

第二表からはこうした事の外、本州では大阪や播州
(兵庫県) から佐伯へ来る人が他の地区より多いこと、
九州(大分県を除く)では長崎からの人が多いのも一つ
の特色だといえる。佐伯藩が小藩であり地理的にも不便
な位置にあるにもかかわらず、かなり広範囲な地域にわ
たって交流が行われていたことが分る。他方交流範囲に
ついて地域的な片寄りが見られ、極めて限定された地域
の人々だけが訪れているともいえそうである。しかしな
がら勤番日記が五八日間という限られた日数のものであ

ながら阿波から来た人達のうち職業が分る
商人2・藍玉屋2があること、来訪先の保
田屋作兵衛(来訪数4)、名護屋幾五郎(同
3)壺屋保右衛門(同1)のいずれもが内
町で商業を営んでいる人達であることから
訪れた人達も商用のためだと考えられる。
とするとその訪れた人達の殆んどは阿波の
藍染関係と判断されることから、そうした
商業関係の結びつきの強さが他地区より多
くの人を来佐させる結果をもたらしたので

るため今のところ断定し難い。

こうした点について何か良い資料があればぜひ御教示

下さることをお願いして、勤番日記の紹介を終わること
にしたい。(以上)

大友氏の歴代墳墓を巡る (二)

古藤田 太

(会員・弥生町江良)

第三代 大友頼泰の墓

墓地 東植田徳ノ尾

墓 五輪塔 (無銘)

常楽寺に行く道を大楽寺で教えられた。三愛病院を左折して、大分川の支流七瀬川を渡る。高瀬石仏はこの近くである。狭い道を霊山の方に登ってゆくと、直ぐ向うに高崎山、左方に由布、鶴見の山々が、手近かにぽっかりと浮ぶ。誰かの詩に「一步、歩高く光景現わる」とはこのような景観であろうか。其の昔、大友頼泰がここに狩猟に訪れた時、霊山から眺望する美観に魅せられて、ここに隠居寺を建てたのが常楽寺であるといわれている。

霊山の下方に延々と流れ来る大分川は、見わたす限りの広大な平地をつくり、府内の町は豊国とよくにの中心として育つたものである。

行くうちに大分市が建てた「大友頼泰公墓所」の案内板が目につき、墓所はすぐわかった。あたりは段々畠の蜜柑園が重なるようにして続いている。一群の雑木の蔭に、いかにも年代を偲ばす、苔むす石垣をめぐるした二坪足らずの狭い墓域に、二米近い堂々たる五輪塔が静寂のうちに建っていた。水輪は半ば欠け落ちてはいるが、概ね整ったもので、威圧感さえある程の立派なものである。側に小さく、苔の中に、辛うじて形をとどむる五輪塔が